

# BAZAR

Harper's

*Art*

WOMEN  
IN ART

アート界のパワーウーマン47人

Scanned

ハーバースバザー  
2016年11月号 別冊付録



# HANAKO MURAKAMI

MEMORIES OF EYES

## 写真表現の根源から立ちのぼる風景

ダゲレオタイプやオートクロームなど、写真黎明期の手法を用いた独創的な作品で  
注目される村上華子。彼女が追い求めるイメージとは。

By Hiroko Suzuki Photographs by Taisuke Yoshida

パリ南部に隣接する、オー＝ド＝セーヌ県のモンルージュは、ロベール・ドアンが1934年の結婚を機にアトリエ兼住居を構え、生涯を過ごした街として知られる場所だ。写真の古典技法や活版印刷術など、過去のものとなるメディアに焦点をあてた緻密なリサーチに基づいた作品で知られるアーティスト、村上華子と待ち合わせたのは、ドアンのアトリエと小さな公園をはさんだ反対側に立つ、写真現像所の「Diamantino Labo Photo (ディアモンティーノ・ラボ・フォト)」。ヨーロッパの写真史を研究し、写真の古典的技法を探求する彼女を取材する場所が、20世紀のフランスを代表する写真家のアトリエの向かいであることに、不思議な縁を感じる。

技師であるディアモンティーノ・キンタスが経営するこのラボは、巨大な引き伸ばし機を所有しており、大判の銀塩写真が制作することができる。このような大型機材の設備に加えて、高度な技術と経験を併せ持つラボは、パリではわずか2軒しか残っていないという。

「せっかく古典技法を研究するなら大判のモノクロ写真も学びたいと、2013年にここへ研修に来たのが、ディアモンティーノとの出会いでした。おかげで基本的な操作は理解できましたが、やはり最終的に重要なのは、数値や言葉では表せない“職人の勘”のようなもの。だから、この世界で長年スキルを磨いてきた彼の技術を信頼して、作業をお願いしています」

多いときは週3～4日通い、テストを繰り返しながら作品を完成させていく。現像所を案内してもらいながら、来

春、上野の森美術館で開催するVOCA展のために制作中のガラス乾板について聞いた。1世紀前のもので、未使用のまま残っているガラス板から現れる実像とは、どのようなものだろう。

「古い写真というと、モノクロフィルムのイメージが一般的ですが、私が着目しているのは、それ以前の技術です。

世界初の実用的写真撮影法として1839年に発表されたダ

ゲレオタイプや、初のネガ・ポジ法で複製を可能にしたカロタイプなど、写真の歴史に残る当時の技法を考察して作品を作ります。1世紀前のガラス乾板を現像することで、100年前の時間の蓄積がそのままの痕跡となって目の前に現れてくる。ヴァージョンの状態で保存しておいた板をカメラに取めて、写真撮影の時に0コマ数秒という時間をキャプチャーして被写体を映し出すのが、本来の写真乾板の役目です。でも実際には、このガラス板は、なにひとつビジュアルを捉えたことがない物

質。すなわち、コンテンツのない状態です。私が作品として作りたいとつねづね考えているのは、このような「イメージと物質の関係について」なのです」

その発想の一環として、村上が最近取り組んでいるのが、あぶらとり紙を使った顔拓だ。写真家の守護聖人である聖ヴェロニカの聖顔布の神秘的なイメージから生まれたア▶

“1世紀前の  
ガラス乾板を  
現像することで、  
100年前の時間の  
蓄積が、痕跡と  
なって現れる”

### HANAKO MURAKAMI

1984年生まれ。2012年よりパリを拠点に活動。今秋、パリの百貨店、ラ・サマリテーヌが開催する企画展「Ma Samaritaine」でモノがもつ記憶をテーマに作品を発表予定。www.hanakomurakami.net



豊かな緑の景観を望む、  
モンルージュのラボの一室で。  
制作中の作品が自然光のなかで  
神秘的な美しさを放つ。

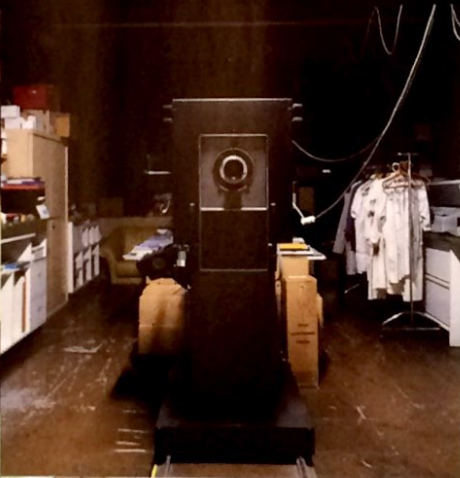


ANTICAMERA (OF THE EYE) #4! (部分)  
2016年 シルバープリント 175×123cm  
今年、タカ・イシイギャラリーで開催された  
展覧会で展示された作品。黎明期の  
カラー写真であるオートクロームから  
着想を得た新作だ。





上:「ANTICAMERA (OF THE EYE) #4」(部分)  
2016年 シルバープリント 175x123cm



左奥:オートクロムの作品を現像したあとにはがれる  
左:大判の引き伸ばし機。  
左下:ラボでの作業は緊張感がただよう。  
下:信頼するキンタス氏と、作品について意見交換を





アイデアで、あぶらとり紙に顔を付け、皮脂でつくるセルフポートレート作品。毎朝起きて、最初に行う「顔拓」制作が日課だという。これも広義の意味で、イメージと物質の関係を形づくることに通じているのだ。

東京藝大で映像研究科修士課程を修了したのち、ベルギー政府の奨学生として渡欧した村上。ベルギー滞在を経て、パリへ拠点を移すきっかけはなんだったのだろうか。

「子どもの頃、父の仕事の関係で6年間ベルギーに住んでいたのですが、いつかヨーロッパへ戻って芸術を学びたいという思いはありました。ブリュッセルのラ・カンブルに留学中、何度かパリを訪れていたのですが、そのたびに、写真が発明された地で学びたいと強く思うようになりました」

その後、レバノン在住の友人の紹介で古典写真収集家と知り合い、それが縁で、どんどん人脈が広がっていった。

「パリの古典写真の世界はとても狭く、あらゆる古い技法を学びたいと知人に話したのがきっかけで、国立文化財学院の写真修復研究所で、3週間の集中研修を受けることになったのです」

技術を習得したあと、デジタルテクノロジーの殿堂であり、古典写真の巨匠、パトリック・バイイ＝メートル＝グランが教鞭に立つル・フレノワへ進学。在学中に着手したのが、自らの経験と写真をめぐるエピソードを織り交ぜた短編映画だった。その映画は、1975年にアニエス・ヴァルダが手がけたパリ14区のダゲール通り（銀塩写真の発明家、ダゲールからの命名）に住む住人たちを撮影した「ダゲール街の人々」から着想を得て、ヴァルダ監督をダゲレオタイプで撮影するところから始まる。写真史に偉大な功績を残したダゲールへのオマージュとして、自分の表現手段

【Self Portrait After St. Veronica】  
2015年 あぶらとり紙 額装  
39.5×39.6×3.5cm

© Hanako Murakami / Courtesy of Taka Ishii Gallery, Tokyo

とはなにかということ考えた末に、ダゲール通りの住人であり、映画を完成させたヴァルダ監督のポートレートをダゲレオタイプで撮影することが、作品に円環構造をもたせるひとつの方法だった、と彼女は考える。

個展のための一時帰国や、アート・バーゼルに出展するための長期スイス滞在などのため、毎日の生活をパターン化することはできない、と笑う村上。パリを拠点にすることで、自身の作品に与える影響はあるのだろうか。

「この街には古いものがたくさんあります。私が住んでいるアパートマンも築100年以上の建物ですし、蚤の市には何世紀も前のものが並んでいる。最初に古い写真に興味をもったのは院生の頃ですが、東京では入手の手段が限られていて、過去のものを見つけるチャンスが少なかった。でもパリには、当たり前のように古いものがあふれていて、物質の存在を感じることができます。そのたまたまに触

れることが、私の作品にとって重要なのです」

実は作家活動以外に、翻訳家としても活動している。「作品にも言葉で表現する要素がありますし、イメージに添える文章が大切な意味をもちます。ビジュアルと言葉の両方が揃って初めて、作品が形成されるのだと思います」。他情報をインプットし、そこから新しいものを生み出すために、テキストにするという作業が必要なかもしれない、とも語る。

「写真的アイデアは、光と影、痕跡の要素から誕生しました。写真史の黎明期には、まだ多くの可能性が潜んでいるかもしれないということが、私の興味をかき立てるのです」

歴史を刻んできた物質とイメージの関係を探り、リリカルな解釈を添える。追究は日々、深化を続けている。 ■

